書體を詠う韻文ジャンル「勢」とその周邊

成田健太郎

一、「勢」というジャンル

『晉書』卷三十六・衞恆傳には、西晉の衞恆が著した『四體書勢』の全文が引かれ、書體の變遷を知るうえでの好資料としてよく知られている。『隋書』經籍志にも「四體書勢一卷　晉長水校尉衞恆撰」とあり、單行の書物として利用されていたようである。この『四體書勢』は、「字勢」「篆勢」「隸勢」「草書勢」という四篇の韻文作品を收錄し、これに序として散文による各書體の解說を加えたものである。「字勢」は衞恆自身の作であり、「篆勢」は後漢の蔡邕、「草書勢」は後漢の崔瑗の作とされ、「隸勢」の作者は明示されていない。この『四體書勢』について、中田勇次郎氏は以下のように言及している。

「四體書勢」は、古文、篆、隸、草の四つの書體について、その體の生成の由來を說き、その美しさを讚歎し、自然現象に擬した華美なことばを縱橫に驅使して形容している。古文は字體の名稱がないので「字勢」といい、「篆勢」は蔡邕があらわし、「隸勢」は鍾繇かまたはそのころの書家の作らしく、「草勢」は崔瑗の作とする。しかし、蔡邕や崔瑗の原撰の文かどうか疑わしい。「四體書勢」の文は序と韻文體の銘贊とより成り、銘贊の文章はとくに華美である。これをよむと勢というのは、書體が自然現象のように生動する形勢を言うもののようで、後世のような筆勢の有無を言うのではない。(1)

ところで、この『四體書勢』の四篇以外にも、六朝時期には「勢」と題し書體を主題とする韻文作品がかなりあり、この一連の作品群を「勢」という文體と認める立場がある。例えば、『藝文類聚』卷七十四（巧藝部・書）には、「賦」「啓」「書」と竝んで、「勢」の項が文體類別の一として設けられ、そこには、「後漢蔡邕篆書勢」「晉衞恆四體書勢」「晉索靖書勢」「晉劉邵飛白書勢」の四條が引かれている。『藝文類聚』の編者にこれらの韻文作品を「勢」という共通する文體の作品群として採錄する意識があったことが一見して分かる。また注目すべきは、『藝文類聚』にはこの箇所以外に文體類別として「勢」の項が立てられていないことである。卷七十四（巧藝部・圍棊）に、圍棊の形勢について述べた應瑒「奕勢」という作品が引かれるが、この項の

文體類別は「勢」ではなく「奕勢」となっている。『藝文類聚』の編者は「勢」を専ら書體を主題とする文體と認識しているのである。

さらに、八十六種の文體についてその由來を說く任昉『文章緣起』[2]には

勢、漢濟北相崔瑗作草書勢。（「勢」は、漢の濟北相崔瑗が「草書勢」を作った〔のが始まりである〕）。

とあり、明の陳懋仁はこの項に

勢、商略筆勢、形容字體者也。（「勢」は、筆勢を論評し、字體を形容するものである。）

と注している。

一方、この「勢」という文體を認めない立場もある。例えば、『四庫提要』卷一百九十五（集部・詩文評類一）に、『文章緣起』が「勢」の項目を立てるのを非難して

崔瑗草書勢、乃論草書之筆勢、而强標勢之一目。（崔瑗の「草書勢」は、草書の筆勢を論ずるものにすぎないのに、無理に「勢」という項目を立てている。）

という。また、『初學記』卷二十一（文部・文字）の「雜文」の項には「漢崔瑗草書體」「後漢蔡邕篆書體」「晉成公綏隸書體」の三篇が引かれている。前の二篇は「四體書勢」に收められる「草書勢」「篆勢」と同一の作品であり、『初學記』の編者が元來「勢」であった題を意圖的に「體」に改めたことが明らかである。なぜならば、『初學記』同所の「事對」の項には「衞恆四體書勢」「鍾氏隸書勢」「鮑昭飛白書勢」「崔瑗草書勢」が「勢」の題のままのべ八條引かれているからである。當時題に「勢」の字を殘すと「勢」という文體と認識される虞が十分あり、『初學記』の編者が「雜文」としては「勢」の題は不都合と考えたのではなかろうか。

このように、「勢」を文體として認めるか否かには見解の相違が見られるが、この相違は畢竟、文體という觀念をどう捉えるかという一點にかかっている。かりに、文體を認定する條件を樣式（スタイル）と主題（テーマ）の二要素であるとしよう。樣式の面を重視するならば、確かに「勢」は賦の變種、「雜文」であると言うこともできる。しかし、主題は書體に限定され、書體を語るという目的意識はかなりはっきりしている。さらに、その主題、目的意識の明確さは、後述のように、構成や表現にも他の韻文作品にないいくらかの特徵をもたらしているのである。このように、共通の主題とそれに由來する樣式面の特徵を備えた作品群を、一つの領域（ジャンル）の作品群として捉え、總合的、多角的に考察することにはやはり相當の意義があるであろう。從って本稿では、「勢」を一つのまとまった文體上の領域（ジャンル）と捉える立場にたち、これを考察の對象としたい。

なお、このジャンルの作品には、後述のように「狀」と題するものも見られるのだが、從來この點は看過され、ジャンル名としては「勢」としか呼ばれない。本稿ではしばらく、この「書體名＋勢」あるいは「書體名＋狀」と題し書體を主題とする韻文ジャンルを、「狀」も含め便宜上「勢」と呼んでおくことにしよう。

この「勢」というジャンルには具體的にどれだけの作品が殘っているのか、その出典を明らかにしてまとめたのが**表**である。なお、同時代で書を主題とする現存の韻文作品は「勢」以外に楊泉（吳晉の交に在世）の「草書賦」（『藝文類聚』卷七十四）、王僧虔（四二六―四八五）の「書賦」（同）、岑文本（五九五―六四五）の「奉述飛白書勢」詩（『初學記』卷二十一）の三作品しかない。初唐以前の書を主題とする文學は、「勢」がほぼその全體を占めているのである。また、王僧虔「書賦」は書體ではなく「書」という大きい概念を主題としているから、「勢」ではなく賦が選ばれている。岑文本「奉述飛白書勢」詩は五言八句の詩であるが、やはりその題名中の「飛白書勢」との表現は「書體名＋勢」の組合せであり、「勢」の遺風と見ることができる。楊泉「草書賦」は唯一「書體名＋賦」の組合せになっており、その樣式も六字句を主體とするなど、後述の「勢」の樣式とは一線を畫している。これは「勢」の成立時期に大きく關わってくるので、後に再度檢討する。

表

	『晉書』衛恆傳	『藝文類聚』卷七十四	『初學記』卷二十一	『書斷』卷上	その他
成公綏（231―273）「隸書勢」[3]			成公綏隸書體	成公綏隸書勢	
索靖（239―303）「草書狀」		索靖書勢		索靖草書狀	草書狀（『晉書』索靖傳）
四體書勢 衛恆（252―291）「字勢」	衛恆字勢		衛恆四體書勢	衛恆古文贊	
蔡邕（133―192？）「篆勢」	蔡邕篆勢	蔡邕篆書勢	蔡邕篆書體	蔡邕大篆讚 蔡邕小篆贊	篆勢（『蔡中郎集』外傳）
鍾繇（151―230？）「隸勢」	隸勢		鍾氏隸書勢	蔡邕隸書勢	隸勢（『蔡中郎集』外傳）
崔瑗（78―143？）「草書勢」	崔瑗草書勢		崔瑗草書勢 崔瑗草書體	崔瑗草書勢	
劉劭（？―352）「飛白書勢」		劉邵飛白書勢		劉彥祖飛白贊	
王珉（351―388）「行書狀」				王珉行書狀	
鮑照（？―466）「飛白書勢」[4]			鮑昭飛白書勢		飛白書勢銘（『鮑氏集』卷十）
梁武帝（464―549）「草書狀」[5]				梁武帝草書狀	王羲之草書勢（『墨池編』筆法一） 梁武帝草書狀（『書苑菁華』卷三）

二、「勢」の様式

それでは、「勢」は具體的にどのようにして書體を語るのか、『四體書勢』「草書勢」を例に分析したい。以下全文を示し、内容を追ってみる。全體は換韻によって四段に分けられる。

書契之興　　書契の興るは
始自頡皇　　始め頡皇自りす
寫彼鳥跡　　彼の鳥跡を寫し
以定文章　　以て文章を定む
爰暨末葉　　爰に末葉に暨びて
典籍彌繁　　典籍は彌いよ繁し
時之多僻　　時之れ僻多く
政之多權　　政之れ權多し
官事荒蕪　　官事は荒蕪し
剿其墨翰　　其の墨翰を剿つ
惟作佐隷　　惟れ佐隷を作り
舊字是刪　　舊字是に刪る
草書之法　　草書の法
蓋又簡略　　蓋し又た簡略す
應時諭指　　時に應じて指を諭し
用於卒迫　　卒迫に用ゐる
兼功并用　　功を兼ね用を并せ
愛日省力　　日を愛み力を省く
純儉之變　　純儉の變
豈必古式　　豈に必ずしも古式ならん

前半三段は書體の由來、意義を述べる部分であり、第一段は蒼頡による文字の發明、第二段は秦における隷書の發生、第三段はそれに續く草書の發生とその效用を說く。以下、「勢」においてこのように書體の由來、意義を述べる部分を「述義部」と呼ぶことにする。これに對し、以下に引く第四段は草書の形狀を言辭を盡して述べつらねる部分であり、「述狀部」と呼ぶことにする。ただし、第四段の末尾には全體のまとめとして草書の效用が少し述べられている。第四段は非常に長いので、内容に卽して區切って引用する。

觀其法象　　其の法象を觀れば
俯仰有儀　　俯仰に儀有り
方不中矩　　方は矩に中らず
員不副規　　員は規に副はず
抑左揚右　　左を抑へて右を揚げ
望之若崎　　之を望めば崎つが若し
竦企鳥跱　　竦企して鳥のごとく跱れども
志在飛移　　志は飛び移るに在り
狡獸暴駭　　狡き獸は暴かに駭き
將奔未馳　　將に奔らんとして未だ馳せず

第四段はまず、威儀を備えていながら、それでいて人爲的な規矩に收まらない草書の自由な形象を言う。次には左右の不均衡がもたらす面白さを言い、さらに飛びまわり馳せまわる鳥獸を登場させる。

或黝黕點黼　　或いは黝黕點黼として
狀似連珠　　狀は連珠に似
絕而不離　　絕えて離れず

ここでは「黝黕點黼」の四字が目を引く。このうち「點」を除く三字は他書に見えない珍字である。しかし、「狀似連珠、絕而不離」というところからすると、これは「灬」のような點の連續する點畫について述べているらしい。「黝黕」「點黼」はそれぞれ雙聲、疊韻の語であり[6]、さらに四字の扁をいみじくも「灬」を含む「黑」で統一し、聽覺、視覺雙方から草書の形狀を形容しているのである。

畜怒怫鬱　　怒りを畜へて怫鬱とし
放逸生奇　　放逸して奇を生ず
或凌邃惴慄　　或いは邃きに凌ぎて惴慄し
若據槁臨危　　槁に據りて危きに臨むが若し
旁點邪附　　旁點は邪めに附き
似蜩螗揭枝　　蜩螗の枝を揭れるに似たり
絕筆收勢　　筆を絕ち勢を收むれば
餘綖糾結　　餘綖は糾結し
若杜伯揵毒緣巇　　杜伯の毒を揵げ巇に緣るが若し
螣蛇赴穴　　螣蛇は穴に赴き
頭沒尾垂　　頭は沒すれど尾は垂る

引きつづき自然や動物の姿を借りて草書の形狀を語ってゆき、「絕筆收勢」の後に殘る餘韻までも動物に喩えている。

是故遠而望之　　是の故に遠ざかりて之を望めば
隓焉若沮岑崩崖　　隓焉として沮岑崩崖の若く
就而察之　　就きて之を察すれば
一畫不可移　　一畫をも移すべからず
機微要妙　　機微要妙
臨時從宜　　時に臨み宜しきに從ふ
略舉大較　　略ぼ大較を舉ぐれば
髣髴若斯」　　髣髴斯くの若し

「是故」以下四句は、遠近の對比により草書の形狀を總括し、最後の四句は草書の效用を簡單に述べたうえで全體を結んでいる。

全體を形式面に注意して見てみると、一句四字、隔句脚韻を基本としているが、前半の述義部がその基本を忠實に守っているのに對し、後半の述狀部は一句の字數、押韻位置ともに一律でない。このような形式面の變化も內容の轉換と一致するものであろう。前半の述義部と後半の述狀部の相違はこれだけでなく、前半部分が順を追って草書の由來、意義を比較的分かりやすく說いているのに對し、後半部分は難字を多用し、手を替え品を替え、繰り返し書體の形狀を形容している。以上を要するに、前半の述義部は形式的にも內容的にも整って分かりやすく、一方後半の述狀部は形式的にも內容的にも變化に富み難解である。他の「勢」の作品も、程度の差こそあれ、傾向を異にするこのような二つの部分から成っている。「勢」あるいは「狀」という題は、中田氏が指摘するように、後半部分で述べられる書體の形勢、形狀を

意味し、文學作品としての力點はやはりそちらにあるものと思われる。

さて、この「勢」という語に關してはとかく誤解が多いので少しく説明を加えたい。まず、「勢」というだけで無條件に「力强い動き」を思い浮かべがちで、書に關してこの語が出てくると、陳懋仁や『四庫提要』のように無條件で「筆勢」「ダイナミックな筆の動き」と理解されるのが常である。しかし、中田氏が指摘しているように、本稿で扱う「勢」は、筆勢を意味しない。F・ジュリアン氏の研究[7]によれば、「勢」という語の含意は、事物の布置とそれがもたらす潛在的效力であるという。これを書に當てはめてみると、書は紙上に靜止しているにもかかわらず、點畫の布置が觀る者に安定と不安定、あるいは靜と動の力學を感じさせる、ということであろう。

ただし、本稿で扱う「勢」の述狀部がそのような書の魅力を表そうとしていることは確かであるが、「書體名＋勢」という題に限っていえば、「潛在的效力」といった高次の含意はないということをここで强調しておかなければならない。なぜならば、題において「勢」と互換可能である「狀」にはどう考えてもそこまでの含意は見出せないからである。よって、「書體名＋勢」の「勢」は、「勢」と「狀」の含意の共通部分である「ようす」「ありさま」という程度の意味で理解しなければならない。書論一般における「勢」という語の含意とその變化は、稿を改めて論ずべき問題である。

三、趙壹「非草書」にみる「勢」の胎動

このような「勢」というジャンルがいつどのようにして發生し形成されていったかという問題は從來詳しく檢討されず、冠せられた作者名が無批判に信じられてきた。中田氏はこれに疑義を呈したが、精確な檢證はいまだなされていない。以下、この問題をいくつかの手がかりをもとに檢討してゆきたい。

まず第一の手がかりは、蔡邕と同時代の人物である後漢・趙壹の「非草書」（『法書要錄』卷一）という八百字弱の論である。この文は、本來手早く書くはずの草書が、當時見榮えを追求するあまりゆっくりと書かれるようになっているのを激しく非難し、それが逆に當時の草書の盛行をよく傳えているという書法史上貴重な文獻である。その中に以下の一節がある。

夫草書之興也、其於近古乎。上非天象所垂、下非河洛所吐、中非聖人所造。蓋秦之末、刑峻網密、官書煩冗、戰攻竝作、軍書交馳、羽檄紛飛。故爲隸草、趣急速耳。示簡易之指、非聖人之業也。但貴刪難省煩、損複爲單、務取易爲易知、非常儀也。故其讚曰、臨事從宜。而今之學草書者、不思其簡易之旨、直以爲、杜崔之法、龜龍所見也。其攟扶柱桎、詰屈反乙、不可失也。（草書が生れたのは、近古の時代である。それは天上からもたらされたものでもなければ、河圖洛書のように水中から現れたものでもなく、聖人が創りたもうたものでもない。秦の末に、刑法が嚴しくなって、公文書が煩雜を極め、戰が重なって、軍事文書が入りみだれ、急報が飛びかった。そこで隸草體を作り、手早く書けるようにした。簡略という主旨を形にしたのであって、聖人の御業ではないのである。ただ難しく煩雜な部分の省略、複雜な部分の單純化を良しとし、書きやすさ讀みやすさを追求したものであって、一定不變の模範にはなりえない。それゆえその讚にも「事に臨み宜しきに從う」と言うのである。それなのに最近の草書を學ぶ者は、その

簡略という主旨を忘れ、「杜操や崔瑗の法書は、龜や龍が形となったものであって、その攡扶[8]して柱桎としたさまや、折れまがって反乙としたさまを失ってはならない」とばかり考えている。）

この中でまず注目すべきは「臨事從宜」という「讚」の引用である。杉村邦彦氏はこの句を崔瑗「草書勢」からの引用とし、次のように言う。

衞恆の「四體書勢」に引く「草書勢」には、「機微要妙、臨時從宜」となっているが、『初學記』卷二一に引く崔瑗の「草書體」には、「機微要妙、臨事從宜」とあって、ここの原文と一致する。いずれにせよ、「非草書」にこの一句が引かれていることは、逆に崔瑗の「草書勢」の史料的價値を高めるものである。[9]

しかし、この句が果たして崔瑗「草書勢」の引用かどうかは疑問が殘る。まず、この句に類似した句は以下の複數の「勢」に現れる。

成公綏「隸書勢」
隨便適宜、亦有弛張。（便に隨ひ宜しきに適ひ、亦た弛張有り。）

索靖「草書狀」
聖皇御世、隨時之宜。（聖皇世を御し、時の宜しきに隨ふ。）

『四體書勢』「隸勢」
隨事從宜、靡有常制。（事に隨ひ宜しきに從ひ、常制有ること靡し。）

索靖「草書狀」の「隨時之宜」は、東方朔「誡子」（『藝文類聚』卷二十三）や崔駰「達旨」（『後漢書』崔駰傳）にも現れる句であり、ごくありふれた常套句であった可能性がある。また、引用される「讚」の作者は示されず、「其」の指示內容は文脈からすれば「草書」であろう。もし當時この「讚」の作者が崔瑗とされていたならば、「最近の草書を學ぶ者が尊崇している崔瑗自身がこのように言っているではないか」という意で崔瑗の名前を出さないほうがむしろ不自然である。趙壹が引用するこの「讚」の句と、後に崔瑗の名を冠せられる「草書勢」との間に何らかの繼承關係はあるかもしれないが、少なくとも、當時崔瑗の作とされる「讚」は無かったといえるのではないか。

むしろこの「讚」からは、後漢のものとして信頼できる『說文解字』敍[10]の以下の一節を想起したい。

一曰指事。指事者、視而可識、察而見意。上下是也。二曰象形。象形者、畫成其物、隨體詰詘。日月是也。三曰形聲。形聲者、以事爲名、取譬相成。江河是也。四曰會意。會意者、比類合誼、以見指撝。武信是也。五曰轉注。轉注者、建類一首、同意相受。考老是也。六曰假借。假借者、本無其字、依聲託事。令長是也。（一に曰く指事。指事なる者は、視て識るべく、察して意を見る。上下是なり。二に曰く象形。象形なる者は、畫して其の物を成し、體に隨ひて詰詘す。日月是なり。三に曰く形聲。形聲なる者は、事を以て名と爲し、譬へを取りて相ひ成す。江河是なり。四に曰く會意。會意なる者は、類を比べて誼を合し、以て指撝を見す。武信是なり。五に曰く轉注。轉注なる者は、類を建てて首を一にし、同意相ひ受く。考老是なり。六に曰く假借。假借なる者は、

本と其の字無く、聲に依りて事を託す。令長是なり。）

これは六つの造字原理である六書についての解説であるが、段玉裁がすでに指摘しているように[11]、六書それぞれの解説のうち中の二句八字は押韻している。「讚」のような形をとっているのである。「非草書」に引かれる「讚」も、四字句で當然押韻する形式であったろう。「八體六文」といわれるように、書體と六書とは傳統的に一組のものと考えられていた。その両方についてその意義を説くことばが似通ったものであったことは想像に難くない。

さて、「非草書」の中で次に注目すべきは、「今之學草書者」の草書に對する認識である。まず、草書を「龜龍所見」と、動物に結びつけて捉え、さらに、「柱桎」「反乙」という雙聲と疊韻の語[12]で草書の形狀を形容する。當時すでに、草書の藝術化にともない、書體の形狀の面白さ、奥深さを他の事物の姿態やオノマトペによって言い表そうとする新しい試みがずいぶん盛りあがっていたのである。ただし、このような新しい風潮は著者趙壹の目には惡しき流行と映ったらしい。趙壹は、書體の由來、意義こそ讚えるべしとする、當時すでに「讚」という文に結實するまでに蓄積、成熟していた、傳統的、保守的な立場に據っていたからである。

四、「勢」と詠物賦

第二の手がかりは、「勢」に特徴的に見られる定型句である。『四體書勢』を一讀すると、四篇の「勢」すべてに共通の定型句が用いられていることに氣づく。その定型句は、第三節で見た「草書勢」でいえば以下の部分である。

是故遠而望之、隓焉若沮岑崩崖。就而察之、一畫不可移。

この定型句は他の「勢」においても以下のように用いられている。

成公綏「隸書勢」

仰而望之、鬱若宵霧朝升、遊烟連雲。俯而察之、凜若清風厲水、漪瀾成文。（仰ぎて之を望めば、鬱として宵霧朝に升り、遊烟雲を連ぬるが若し。俯きて之を察すれば、凜として清風水を厲り、漪瀾文を成すが若し。）

索靖「草書狀」

舉而察之、又似乎和風吹林、偃草扇樹。（舉げて之を察すれば、又た和風林に吹き、草を偃せ樹を扇ぐに似たり。）

『四體書勢』「字勢」

是故遠而望之、若翔風厲水、清波漪漣。就而察之、有若自然。（是の故に遠ざかりて之を望めば、翔風水を厲り、清波漪漣するが若し。就きて之を察すれば、自ら然るが若き有り。）

『四體書勢』「篆勢」

遠而望之、象鴻鵠羣游、駱驛遷延。迫而視之、端際不可得見、指撝不可勝原。（遠ざかりて之を望めば、鴻鵠の羣游し、駱驛として遷延たるに象る。迫りて之を視れば、端際得て見るべからず、指撝勝げて原ぬべからず。）

『四體書勢』「隸勢」

遠而望之、若飛龍在天。近而察之、心亂目眩。（遠ざかりて之を望めば、飛龍の天に在るが若し。近づきて之を察すれば、心亂れ

目眩(くら)む。）

これらの定型句は、概ね書體の形状を俯瞰と詳察によって對比的に描き、述べつらねてきた比況を總括しあるいは轉換する要所に配されている。他方、東晉以後の作である劉劭「飛白書勢」、王珉「行書狀」、鮑照「飛白書勢」、梁武帝「草書狀」にこの定型句が確認できないことは注目される。

この定型句は賦にも散見され、漢代から見られるものであるが、用例の大多數を以下のような魏末晉初の詠物賦が占める。[13]

傅玄（二一七―二七八）「宜男花賦」（『藝文類聚』卷八十一）

遠而望之、煥若三辰之麗天。近而察之、晃若芙蓉之鑒泉。（遠ざかりて之を望めば、煥として三辰の天に麗(つ)くが若し。近づきて之を察すれば、晃として芙蓉の泉に鑒(かんが)みるが若し。）

夏侯湛（二四三―二九一）「宜男花賦」（同卷八十一）

遠而望之、灼若丹霞照青天。近而觀之、煒若芙蓉鑒淥泉。（遠ざかりて之を望めば、灼として丹霞の青天に照るが若し。近づきて之を觀れば、煒として芙蓉の淥泉に鑒(かんが)みるが若し。）

潘岳（二四七―三〇〇）「蓮花賦」（同卷八十二）

其望之也、曄若皦日燭崑山。其節之也、晃若盈尺映藍田。（其れ之を望むや、曄として皦日の崑山を燭(て)らすが若し。其れ之を節するや、晃として盈尺の藍田に映ゆるが若し。）

潘尼（二四七？―三一一？）「安石榴賦」（同卷八十六）

遙而望之、煥若隋珠燿重川。詳而察之、灼若列宿出雲閒。（遙かに之を望めば、煥として隋珠の重川に燿(かがや)くが若し。詳らかに之を察すれば、灼として列宿の雲閒に出づるが若し。）

佐竹保子氏は、この定型句から「詩文に自負を持つ貴族たちが、身近にある共通の素材で賦を綴り、氣に入った修辭や措辭を襲用し合う、サロンの光景」が浮かびあがってくる、と指摘している。[14] このことは、かれらだけでなく、同時代に「勢」においてこの定型句を用いた成公綏、索靖、衞恆にも當てはまるのではないか。つまり、「勢」を、書體という身近にある共通の素材を主題にした詠物賦の一種と考えれば、この時代の「勢」にこの定型句が襲用されるのはごく自然なことであり、この定型句が東晉以後「勢」に用いられなくなることも納得できる。ただし、本來詠物賦におけるこの定型句は、遠近、高低の視覺の移動の效果を狙ったものであり、「勢」のような總括、轉換の機能はない。遠くから近くから、またさまざまな角度から觀察するという趣向は、詠物賦において自然に成長したものであろうが、これが、觀察する距離や角度によって見る者に異なった印象を與える、という書特有の美の構造を言語化しようとする「勢」の作者たちに特に注目され、總括、轉換という特別な機能を與えられたのであろう。さらに、當時流行していた定型句を要所に配することで、讀者の注意を喚起することができる。もし「勢」が詠物賦そのものであったならば、このような機能は持たせられまい。この定型句から、「勢」と詠物賦との近接と、近いながらも保たれていた差異との兩方が窺えるのではないだろうか。

また、この定型句はもう一つの重要な問題を解く手がかりを與えてくれる。それは、『四體書勢』の「篆勢」「隸勢」「草書勢」の作者の眞僞とその本當の成立時期である。前節で述べたように、書體の形狀

に關する言説が、いまだ發達段階にあった後漢後期に「草書勢」「篆勢」の述狀部にまとめられるまでに充實していた可能性は低い。「隸勢」に至っては、衞恆自身が作者を特定せず、後人が鍾繇に比定しているにすぎない。そして、三篇がともにこの定型句を用いているところからすると、その成立時期は魏から西晉の閒と考えるのが自然に思われる。さらには、この三篇は實は衞恆の創作なのではないか、つまり『四體書勢』全體が衞恆の自作自演なのではないかという疑念も生じてくる。

しかし、衞恆が全くのゼロから『四體書勢』を創作したとは考えるのはやはり行き過ぎである。もしそうだとすれば、衞恆は自由に名人の名を借用することができるはずで、「隸勢」のみ作者が示されないのは不自然である。また、「篆勢」「隸勢」「草書勢」の三篇、とりわけ「篆勢」と「草書勢」は、『四體書勢』のテキストとそれ以外の文獻に引かれるテキストとの異同が著しい。もし衞恆が全くのゼロから『四體書勢』を創作したとすれば、ここまでのテキストの亂れは説明できない。やはり、衞恆以前に三篇ともある程度テキストの形になっていて、衞恆がそれを整理したと考えるべきであろう。

五、「勢」の形成と展開（東晉まで）

以上の分析を基に、「勢」の形成と展開の過程を跡づけてみたい。

まず、後漢後期の様子は「非草書」から窺える。書體の意義を説く「讚」がすでに行われ、これが「勢」の述義部に直接連なると見られる。一方、「勢」の述狀部に連なるものとしては、書體の形狀を自然物に結びつけたり、オノマトペによって形容したりする言説が蓄積されていたようだが、「讚」のように固定された文として共有される段階にまでは至っていなかったと考えられる。

魏に入って、それまでに行われていた「讚」と、「勢」の述狀部に連なる言説との兩者がしだいに篆・隸・草の書體ごとにまとまっていったと考えられる。これが『四體書勢』のうち篆・隸・草三體の「勢」の原型である。そしてそれらは「書體名＋勢」と題され、各體の名人と傳えられる人物の名が冠せられていったのである。書體の意義、形狀兩面の美點を述べつらねた文を讀んだ讀者が想起するのは、當然その書體を能くした往時の名人の名であり、その名がいつの閒にか作者と意識されるのも自然の成り行きである。ここから中國古典文學における作者と作品世界との境界の曖昧さを想起することも許されよう。また、『四體書勢』においては「隸勢」の作者は示されず、衞恆より後に鍾繇の名が冠せられていることにも注意したい。後世隸書の名人と讚えられる書人の中で最も古い魏の鍾繇も、衞恆の時代にはいまだ絶對的な名聲はなかったため、「隸勢」だけはいまだ特定の作者が意識されていなかったのではないか。ここから、ある書體の名人がその死後讚えられ、その名聲が高まり、その書體を詠う「勢」にその名が冠せられるに至るまでどれほどの時閒が必要か、感覺が摑めよう。

三體の「勢」がまとまってゆくうえで受け皿となった様式が魏晉に流行した詠物賦であることはすでに述べたが、これはすでに收斂しつつあった書體の美點に關するアイデアがとりあえず落ち着く場所を求めた結果であり、その様式は詠物賦そのものではない。もしそうでなく、詠物賦の側が新しい題材を求めた結果書體に行き着いたのであれば、「勢」と題することもなく、獨自の様式もないであろう。一方、吳の楊泉の「草書賦」[15]の様式は「勢」に似ず、詠物賦そのもののようである。魏において進んでいた「勢」への收斂は吳にまで波及し様式

を提供するほどのものではなかったのである。このことは、後漢にはまだ様式を提供しうる「勢」というジャンルが存在しなかったこと、また一方では、書體を語ろうとする欲求が三國の頃には局地的ではなく一般に高まっていたことを示している。

西晉に入ると、三體の「勢」はすでにテキストとしてかなり固定されたと見られ、成公綏と索靖がその様式を用いてそれぞれ「隸書勢」「草書狀」を作っている。索靖が草書を能くしたことはよく知られているが、かれらは奇しくもともに張華にその才を認められた文人であり、ここで想起すべきはやはり前述の「サロンの光景」である。當時流布しはじめた書體を詠う文學から刺激を受け、その様式を襲用し、同じ書體を素材として作品を綴るという行爲は、同時代の文人間における競作と大きく違わないであろう。再び佐竹氏のことばを借りれば、かれらの作と往時の名人の「勢」は「かりに實際に一堂に會さなかったとしても、かれらの意識の上では、相互の競作」[16]であったのではなかろうか。同じ書體でもこのような面白い表現もある、このような奥深い意趣もある、と多彩なアイデアを開陳することがかれらの喜びであったろう。

衞恆は、その書藝によって索靖と竝び稱せられた衞瓘の子である。しかし、衞恆の『四體書勢』は、成公綏、索靖二家の「勢」とは異なる意圖によって作られている。衞恆は、まず既存の篆、隸、草三體の「勢」を整理してテキストとして固定し、これに古文を題材にした自作の「字勢」を加え、四體の「勢」の決定版『四體書勢』とした。こうした行爲から競作という意圖は感じられない。感じられるのは、往時の名人の書の價値を古典として固定し、それを體現したことばを現在、そして未來の人々に利用しやすい形にして殘そうという意志である。このような衞恆の意圖は成功したといってよい。『四體書勢』が單行の書物として行われ、『晉書』にまで引用されていることがそれを示している。そして、古文學者である衞恆は、すべての書體の根源である古文を既存の三體の前に置くことによって古文と自らの存在感を示すことを忘れない。「字勢」の持つ意味は、アイデアの多彩さを主張することではなく、從來「勢」で題材にならなかった書體の正統性や價値を主張することである。衞恆以前にも、古文の正統性や價値は十分に言われていたはずである。それでも「勢」によって言わなければ古文の正統性や價値を説明したことにはならない、という意識が衞恆、あるいは當時の人々にあったのであろう。

このように、「勢」が西晉の人々によって文學の側からも書體學の側からも興味を持たれていた様子が見えてきたが、東晉においては、劉劭、王珉がそれぞれ「飛白書勢」「行書狀」を作っている。この二作品は完全な形では殘らないため、確實なことは言えないが、概ね「勢」の典型に則った作と見られる。また、飛白書と行書は當時としては比較的新しい書體であり、これを主題にして新しい「勢」を創作しよう、そして新しい書體の面白さ、奥深さを「勢」によってことばに殘そう、という兩方向からの欲求がこの二作品を産んだことは閒違いないであろう。ここから、東晉においても「勢」がその本來の求心力を保っていたといえよう。

最後に、「勢」が果たしたであろう役割を一言でいえば、書體の意義、形狀兩面の美點に關するアイデアを書體ごとにまとめ、優れた書を語り、認識するための共通の言語を提供したということになるのではないか。その言語を提供するという役割は、次節において確認することができる。

六、劉宋以降の「勢」と散文書論

前節まで、東晉までの「勢」の形成と展開を跡づけたが、本節では、それ以降の「勢」とその周邊を追跡したい。

劉宋以後に作られた「勢」は鮑照の「飛白書勢」と梁武帝の「草書狀」の二作品しかない。この二作品を見てみると、鮑照「飛白書勢」は、四字一句で通底し、述義部と述狀部の明確な區別もなく、「勢」の典型から離れたものになっている。またの題を「飛白書勢銘」とするのはこれによるであろう。一方、梁武帝「草書狀」は、形式としては「勢」の典型を守っているようだが、本文において述べるのはすべて書體の形狀であり、書體の由來、意義は序文に押し出された形になっている。このように、劉宋以後は作品數が少ないだけでなく、その樣式も典型から離れていっており、「勢」のジャンルとしての求心力が失われていった時代と捉えられる。このような求心力低下の原因はどこにあるのか。

原因としてまず擧げるべきは、書を語るためのもう一つのジャンルとして、散文による書論が成長してきたということである。その一つの主流は、古今の書人の傳やその書に對する評を集めた書人列傳型の論である。書人の個性という主題が人々の興味を惹いていたことは、書體を主題とする「勢」の求心力低下の原因として注目してよい。

もっとも、書體への興味が全く失われたわけではない。南朝において樣々な事物を象った意匠文字である雜體書が流行していたことは多くの記錄が傳えるところである。ただ、この雜體書は、概ね可能な限り多種多樣な書體を連ね、その珍奇さを賞玩する性質の書藝であり、書體への興味とはいっても、『四體書勢』のように各體の美點を一つの形に收斂する方向のものではなく、無限の增殖を好むものである。價値の多樣化、多彩さを良しとし、樣々な個性を擔う書人や書體を無限に增殖させる、というのがこの時代の一つの潮流だったのではないだろうか。とすれば、有限の書體に多樣なアイデアを集約させる性質の「勢」が求心力を失ってゆくのも頷ける。

このような潮流の一方で、多樣な價値を體系づけて整理しようという動きも現れはじめる。まず、梁・庾肩吾（四八七―五五一）の『書品』（『法書要錄』卷二）は從來の書人列傳型に品第法を採り入れ、古今の書人を九段階に格づけし、この方法は唐・李嗣眞（？―六九七）の『書後品』（同卷三）に受け繼がれた。また、唐・孫過庭の『書譜』（六八七成）は、駢文を驅使して書かれた總合的書論であり、內容も充實している。このような書論こそ、記錄から脫皮した「論」と呼ぶにふさわしいものである。

さて、「勢」が作られなくなってゆく一方で發達していった散文書論から、「勢」から受けた影響、あるいは當時の「勢」の受容のされ方を窺うことはできないであろうか。

そこでまず、書人列傳型の書論である南齊・王僧虔（四二六―四八五）『論書』（『法書要錄』卷一）の以下の記事を見てみよう。

亡從祖中書令珉、筆力過於子敬書。舊呂云、有四疋素、自朝操筆、至暮便竟、首尾如一、又無誤字。子敬戲云、弟書如騎騾駸駸、恆欲度驊騮前。（亡き大叔父中書令王珉は、筆力において王獻之に勝った。古い品評に「四疋の帛があれば、朝から書き始めて暮には書き終え、首尾一貫した字で、しかも誤字がなかった。王獻之は戲れに『君の書は、騾馬に乘って疾驅し、いつもかの名馬驊騮

を追い抜こうとしているようだ』と言った」という。）

索靖……甚矜其書、名其字勢曰、銀鉤蠆尾。（索靖は……自分の書にたいへん自負をもち、その字の勢（すがた）を「銀の鉤、蠆（さそり）の尾」と稱した。）

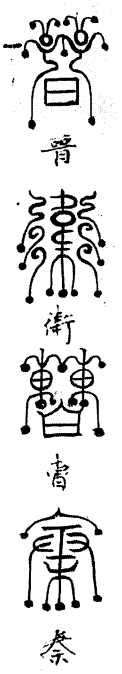
前者の記事には、王珉の書を騾馬の疾走に喩える表現が見える。[17] これは、「勢」の述狀部に代表される比況というアイデアを書人の個性を述べるために引用したものである。後者の記事は、索靖「草書狀」の「婉若銀鉤」の句と關係するであろう。索靖が「草書狀」を書いたのは當然自らの書を自慢するためではないが、後世の人がどう捉えるかは自由である。このように、「勢」が書人の個性を述べるために利用されていることは、書人への興味という潮流と一致し、また、「勢」や「勢」の述狀部に代表される比況というアイデアが相當廣まっていたことを示していよう。

次に、雜體書と「勢」の關わりを探ってみよう。まず引用するのは、『初學記』卷二十一に引く劉宋・王愔『文字志』（『法書要錄』卷一に目錄のみ存す）の逸文である。

垂露書、……阿那若濃露之垂、故謂之垂露。（垂露書は、……濃い露がしたたるように婀娜（あだ）となまめかしく、それゆえ「垂露」とよぶ。）

ここにはオノマトペと比況という二つの要素が備わっている。この垂露という書體は、南齊・竟陵王蕭子良（四六〇―四九四）『篆隸文體』に圖のような實例が確認できる。これを見ると、確かに點畫の末端にしたたる露のような膨らみがくっついている。このようなことばによって雜體書の正統性や價値が裏づけられたであろうし、また逆に、雜體書の增殖は、このようなことばの增殖に引っ張られたものであったのかもしれない。

圖　『篆隸文體』毘沙門堂藏抄本（古典保存會影印、一九三五）



以上のように、書人列傳型書論においても雜體書においても、「勢」や「勢」の述狀部に代表されるアイデア、表現は、それぞれの目的に應じて自由に解釋され、利用されている。また、「勢」がほとんど作られなくなったこの時代にも、從來の「勢」には見られなかった新しい表現が次々と產み出されていることがわかる。「勢」とは、一般に流布した無限のことばのごく一部がたまたま文學作品として結實し表出したものと捉えるべきかもしれない。ただし、以上の書論の「勢」とのつながりは述狀部に限られる。述義部の表現はそもそもヴァリエーションが少なく、述狀部ほどの廣がりは持たせにくいからである。

では、このような多樣な個性を體系づけて整理しようとする後發の書論においては、「勢」の影響はどのような形で見られるであろうか。以下二つの例を擧げる。

庾肩吾『書品』[18]上之上・論

隸既發源秦史、草乃激流齊相。跨七代而彌遵、將千載而無革。誠開博者也。均其文、總六書之要、指其事、籠八體之奇。能拔篆籀於繁蕪、移楷眞於重密。分行紙上、類出蠒之蛾、結畫篇中、似聞琴之鶴。峰末閒起、瓊山慚其斂霧、漪瀾遞振、碧海慚其下風。抽絲散水、定其下筆、倚刀較尺、驗於成字。眞草既分於星芒、烈火復成於珠佩。或橫牽竪掣、或濃點輕拂。或將放而更留、或因挑而還置。敏思藏於胸中、巧意發於毫銛。詹君端策、故以迷其變化、英韶傾耳、無以察其音聲。殆善射之不注、妙斵輪之不傳。是以鷹爪含利、出彼兔毫、龍管潤霜、遊茲蠒尾。學者鮮能具體、窺者罕得其門。若探妙測深、盡形得勢、烟華落紙將動、風彩帶字欲飛、疑神化之所爲、非人世之所學。惟張有道・鍾元常・王右軍其人也。

（隸は既に源を秦史に發し、草は乃ち流れを齊相に激す。七代に跨りて彌いよ遵ひ、將に千載ならんとして革むること無し。誠に博きを開く者なり。其の文を均しうし、六書の要を總べ、其の事を指し、八體の奇を籠む。能く篆籀を繁蕪より拔き、楷眞を重密より移す。行を紙上に分てば、蠒を出づるの蛾に類し、畫を篇中に結べば、琴を聞くの鶴に似たり。峰末閒ま起り、瓊山も其の斂霧に慚ぢ、漪瀾遞ひに振ひ、碧海も其の下風に慚づ。絲を抽き水を散らして、其の下筆を定め、刀に倚り尺に較べて、成字に驗す。眞草は既に星芒に分れ、烈火は復た珠佩に成る。或いは橫に牽き竪に掣き、或いは濃く點じ輕く拂ふ。或いは將に放たんとして更に留まり、或いは因つて挑みて還た置く。敏思は胸中に藏し、巧意は毫銛に發す。詹君策を端すとも、故より以て其の變化に迷ひ、英韶耳を傾くとも、以て其の音聲を察すること無し。殆きは善射の注がざるがごとく、妙なるは斵輪の傳へざるがごとし。是を以て鷹爪は利を含みて、彼の兔毫に出で、龍管は霜を潤して、茲の蠒尾に遊ぶ。學ぶ者は能く體を具ふる鮮なく、窺ふ者は罕に其の門を得。妙を探り深きを測り、形を盡し勢を得、烟華紙に落ちて將に動かんとし、風彩字に帶びて飛ばんと欲するが若きは、神化の爲す所かと疑ひ、人世の學ぶ所に非ず。惟だ張有道・鍾元常・王右軍其の人なり。）

孫過庭『書譜』[19]

觀夫懸針垂露之異、奔雷墜石之奇、鴻飛獸駭之資、鸞舞蛇驚之態、絕岸頹峯之勢、臨危據槁之形、或重若崩雲、或輕如蟬翼、導之則泉注、頓之則山安、纖纖乎似初月之出天崖、落落乎猶衆象星之列河漢、同自然之妙有、非力運之能成。（夫の懸針垂露の異、奔雷墜石の奇、鴻飛獸駭の資、鸞舞蛇驚の態、絕岸頹峯の勢、臨危據槁の形を觀れば、或いは重きこと崩雲の若く、或いは輕きこと蟬翼の如く、之を導けば則ち泉のごとく注ぎ、之を頓むれば則ち山のごとく安く、纖纖乎として初月の天崖に出づるに似、落落乎として猶ほ衆星の河漢に列ぶがごとく、自然の妙有に同じく、力運の能く成すに非ず。）

この二つの例は、どちらも鍾繇、張芝、王羲之、王獻之の草隸（楷行草に相當）の書を對象とし、凝った駢文で書かれている。そして、書體の由來を述べ、比況やオノマトペによってその形狀を述べる點は「勢」と酷似し、これで押韻しさえすれば「勢」としても十分通用する美文である。

このように、庾肩吾や孫過庭は鍾張二王の草隸によって書の價値を

集約し、そのことばは意識的にか無意識のうちにか「勢」と似通ったものとなっている。「勢」の作者が一つの書體を主題としてその書體の美點に關するアイデアを集約させたように、『書品』や『書譜』は、書のあらゆる美點を鍾張二王の草隸という頂點に集約して讃えるため、類似した表現となったのである。魏晉において詠物賦が、この時代において駢文がその受け皿となったのは、當時の文學の趨勢を考えればごく自然なことであろう。

七、「勢」という書論、「勢」と書論

「勢」は從來、書論の一種として扱われるのが常であった。確かに、書論を書に關する何らかの意見が表明されたことばと廣く解釋すれば「勢」を書論とすることに何ら問題はない。しかし、書の價値の本質を體系的、論理的に解き明かそうとすることばを書論と捉えるならば、「勢」をそのような狹義の書論と同列に扱うことはできない。狹義の書論は、書人列傳型書論を母胎としており、そのジャンルは強いていえば傳である。傳とは、事實の描寫を積み上げ、それによって對象に對する評價を表明するスタイルであって、これは體系的、論理的に書を評價しようとする精神と合致する。ところが、「勢」は文學に近接した存在であり、對象とは別個の完結した文學的世界を創出し、現實の書とその世界との對照、反響によって書の魅力を間接的に印象づけようという主旨のスタイルである。換言すれば、狹義の書論は、狀況證據を積み上げることで書の價値の本質に接近しようとするが、「勢」は、意圖的に書の價値を讀者から遠ざけ、手の届かない高みに上せようとする。

このことは、書と竝ぶ藝術分野である繪畫を主題とする文學と比較するとさらに鮮明になる。繪畫を主題とする文學として早いものでは、西晉・夏侯湛の「東方朔畫贊」（『文選』卷四十七）が著名である。この作品は、肖像畫を介して作者が古の東方朔に思いを致す、という筋立てであり、その畫の筆遣いや色遣いを具體的に褒めるようなことはない。むしろ、觀る者に畫であることを忘れさせ、觀る者と描かれた內容とを直接つなぐ完璧なメディアとして機能する畫こそ優れた畫なのである。しかし、書を主題とした文學においてこの手法は通用しない。なぜならば、書を介してそこに書かれた詩文のすばらしさ、あるいはその內容たる人物や故事に思いを致したところで、何ら書の價値を語ったことにはならず、言語あるいは文字のメディアとしての機能を讃えたことにしかならないからである。書の價値はそのようなところにあるのではなく、本來メディアにすぎない文字の形狀に魅力を感じてしまう、という微妙な心理から來ている。それゆえ、書の價値を語るには、その效用を說くだけではなく、その形狀が祕める魅力を是非とも語らねばならないのである。これこそ繪畫を題材とする文學には生じず、「勢」の述義部と述狀部という構造に現れた、書を語る文學の魅力であり難關である。

しかし、いくら比況やオノマトペに賴っても、書の魅力は言語に代替できるものではない。そのことは「勢」の作者も認識しており、「勢」の末尾はしばしば以下のような文句で締めくくられる。

成公綏「隸書勢」

形功難詳、聊舉大體。（形功は詳らかにし難く、聊か大體を擧ぐ。）

『四體書勢』「字勢」

覩物象以致思、非言辭之可宣。（物象を覩て以て思ひを致すも、

言辭の宣ぶべきに非ず。）

梁武帝「草書狀」

蓋略言其梗概、未足稱其要妙焉。（蓋し略ぼ其の梗概を言ふも、未だ其の要妙を稱するに足らず。）

これは、言語という價値代替手段の可能性を否定することにより、逆に語るべき對象の位置を押し上げようという手法である。この手法は、前節の『書品』『書譜』の引用の末尾にも用いられている。これらの本格的書論は、書人列傳型書論を母胎としながらも、狀況證據を積み上げるだけでなく、最高の價値を認める鍾張二王の書については「人智の及ぶべきものにあらず」という言い方でその價値を印象づける。書人列傳型書論において蓄積されてきた價値に鍾張二王を頂點とする序列、體系を與えるためである。

狹義の書論は、良くも惡くも、書の價値を人閒に理解可能な範疇において支配的に決定しようとする論である。しかし、書の價値がそのような論によって決定されることは永遠にないであろう。もしそれが可能ならば、書に獨自の藝術としての價値などないのである。一方、「勢」は、書の價値に對して支配的であろうとはせず、高みにあるものをやや遠まきに詠い、褒めあげるものである。これは「勢」の述義部、述狀部の兩方に當てはまり、詠物賦や贊、頌といった韻文のいずれにも多かれ少なかれ含まれる要素である。これが、本稿において「勢」を「書體を詠う韻文」と稱するゆえんである。今後「勢」を含む廣義の書論の分析が「何が書かれているか」だけでなく「如何に書かれているか」を念頭に置いた新たな段階に入ってゆくことが望まれる。

注

(1)「中國書論史・漢魏晉南北朝・漢、魏、晉、宋の書勢論」『中田勇次郎著作集　第一卷』（二玄社、一九八四）一四頁。

(2)『叢書集成初編』による。『四庫提要』が指摘するように、任昉の『文章始』は隋までに亡び、現行の『文章緣起』の大部分は唐人の補筆になると考えられている。しかし、本稿においてこれは大きな問題にはならない。

(3)『初學記』の「體」は「勢」を改めたものであるから、本來の題は『書斷』のように「隸書勢」であったはずである。

(4)『鮑氏集』は題を「飛白書勢銘」とし、形式としては確かに銘に似ているので本來「銘」と題した可能性もあるが、逆に銘に似ているという理由で後に「銘」の字が加えられた可能性もある。本稿ではしばらく『初學記』に從っておく。

(5)『墨池編』は王羲之の作とするが、序に王羲之より後の人の名が見えるのでその可能性はない。

(6)「黝」は『集韻』に「展豸切」（上聲）、「黈」は『廣韻』に「知庾切」（上聲）、「黼」は『集韻』に「乃玷切」（上聲）とある。『集韻』の反切は、「黝黈」「點黼」の二語がそれぞれ雙聲、疊韻の語であることを前提に比定された節があるが、旁だけを手がかりに雙聲、疊韻の語と考えても無理はない。

(7)　フランソワ・ジュリアン／中島隆博譯『勢　效力の歷史―中國文化横斷―』（知泉書館、二〇〇四）。

(8)「擺」字は他に用例無く音義不明。

(9)『中國書論大系』第一卷・漢魏晉南北朝（二玄社、一九七七）一五頁「非草書」譯注。

(10) 段玉裁『說文解字注』による。
(11) 當該箇所の段注「每書二句皆韵語也」。
(12) 「桎」の字音は通常シツ（之日切）であるが、『集韻』にはチ（展几切、上聲）の音もある。「友」は上古音月部、「乙」は質部。
(13) ほかにも傅玄「朝會賦」（『藝文類聚』巻四）、庾儵（魏晉の交に在世）「石榴賦」（同巻八十六）にこの定型句が確認できる。
(14) 佐竹保子『西晉文學論—玄學の影と形似の曙—』（汲古書院、二〇〇二）一三二頁。
(15) 『藝文類聚』は「晉陽泉草書賦」（陽は楊の誤り）とするが、楊泉は最初吳に仕えた人物である。「草書賦」は、その文中に「皇著法乎今斯」と、吳の皇象を讃えていることから、吳において書かれた可能性が高い。
(16) 佐竹前掲書同所。
(17) 梁・鍾嶸『詩品』（中品・王僧達）にも「征虜卓卓、殆欲度驊騮前」とある。
(18) 中國美術論著叢刊『法書要錄』（人民美術出版社、一九六四）による。
(19) 『中國書論大系』第二巻・唐1（二玄社、一九七七）所收「書譜」による。